

関西医科大学・学生との交流（進路&行事）

関西医科大学附属病院分教室

1 はじめに

関西医科大学附属病院分教室は病棟5階にあり、医師の許可を得た児童生徒が教室やベッドサイドで学習している。入院理由は小児がん（白血病・脳腫瘍など）、消化器疾患（クローン病・潰瘍性大腸炎）、整形外科疾患など様々で、期間も1か月から1年以上に及ぶことがある。私が赴任した一昨年は新型コロナウイルス感染症の影響が残り、N95マスクの着用や病棟への立ち入り制限から、行事や交流の実施が困難であった。一方、分教室の課題としてアンケートから「進路について学ぶ機会」「運動会やお楽しみ会への参加」が未達成課題として挙げられていた。これは分教室に進路指導の企画や運動会自体が存在しないことが要因であると考えられる。本来、私は校内において行事や進路の係ではない他の立場であるが、個人の範囲でも工夫・改善できる点はあると考え、係の目標やねらいの妨げにならないよう、別の角度からスモールスタートで新しい活動を模索していくことを考えた。

2 資源「ヒト・モノ・情報」の活用

予算がなくても活用できる資源として、基本は「ヒト・モノ・情報」が考えられる。赴任初年度、モノの活用では、他の分教室で使われなくなったゲーム機とスポーツソフトを復活させ、限られた教室スペースでもチーム戦やトーナメント戦で、児童生徒が交流できる「お楽しみ会」を実施してきた。車いすや点滴中の児童生徒も運動を楽しめるからである。情報の活用では、一般社団法人星つむぎの村から、無償でプラネタリウム観賞セットをお借りし、各分教室を含め、暗い教室で、美しい夜空や星座を観る体験企画を実施できた。

赴任初年度後半からは、ヒトの資源の活用を検討する中で、隣接する関西医科大学やその学生について情報収集を始めた。その後、各方面との協議を経て、看護学部・リハビリテーション学部の両学部、部活動であるコールクライス（混声合唱）部から交流の協力を得ることができた。対面行事の少ない児童生徒にとって、大学生との交流は楽しみとなり、人間関係形成や他者への関心を通して社会形成能力につながることは容易に想像できた。一方で、医療系大学生との交流を通して、自らの将来や進路を考える契機や、交流の内容や形式を複数に分けて、主体的・対話的で深い学びの機会にもしていきたいと考えていった。

3 関西医科大学の学部・学生との交流

(1) 看護学生さんへの進路インタビューについて

笑顔あふれる看護学生さんから、医療・衛生・健康に関するクイズや、看護師をめざす動機、努力していること等をインタビュー形式で伺った。医療の知識や技術も含め、患者さんの大切な命を預かる仕事であることを学んだ。



(写真) 看護学生さん

I 実践報告

事後学習における子どもたちのお礼と感想

- ・授業をありがとうございました。クイズやお話をきいてとても勉強になりました。楽しかったです。
- ・忙しい中、来てくれてありがとうございます。3択クイズが楽しかったです。「小・中学生時代の自分に会えたら、どんなアドバイスをする？」の質問で、勉強やしっかり食べることが大事だとわかりました。
- ・ありがとうございました。勉強や笑顔、コミュニケーションが大事なんだと思いました。
- ・お忙しい中、ありがとうございました。これからも看護師さんの勉強をがんばってください。りっぱな看護師さんになって、しんどそうな人をたくさん助けてあげてください。

(2) コールクライス（混声合唱）部との音楽交流について

大学の部活動である混声合唱部さん10人と、歌のイントロクイズや「勇気100%」の合唱で盛り上がった。仲間と気持ちを一つにして歌う楽しさ、複数の声が重なる音色の美しさ、一体感となった合唱の感動を味わうことができた。将来、医師、研究者、看護師をめざす学生の日々の努力も知ることができた。



(写真) コールクライス（混声合唱）部の皆さん

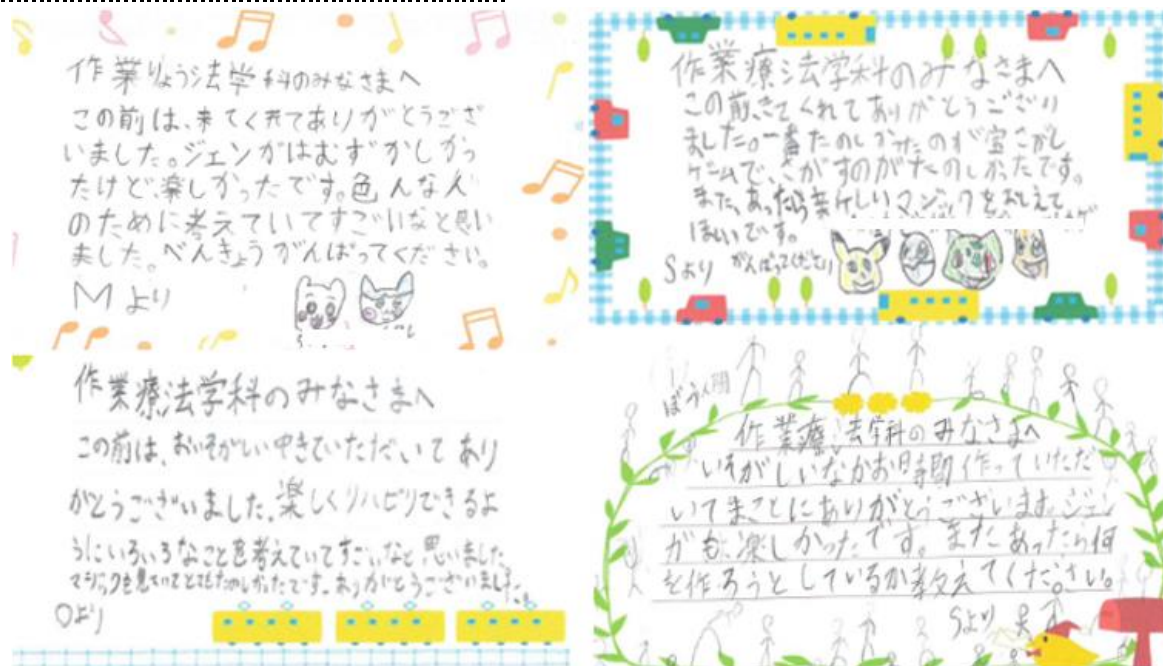
(3) リハビリテーション学部作業療法学科との交流について

やりたいけれど難しいことを支援し、できた喜びや自信につなげることが作業療法士の役割であると学んだ。指先の感覚を使ってお宝を探すゲームや、マジックショーを楽しみつつ、交流を通じて、患者に寄り添いながら、目標に向かって様々な工夫や支援をしていることを理解できた。



(写真) リハビリテーション学部作業療法学科の皆さん

事後学習における子どもたちのお礼と感想



4 振り返り

- ・医療系の学生を見ていて、社会人経験や年齢よりも、やる気と実践力が勝ることを感じた。授業のねらいや児童生徒の情報を共有し、学生にも学びの機会につながるように意識した。
- ・自身で計画、交渉、準備、実践、記録することで、新しい構想が浮かぶようになった。枠組みがない、ゼロから考えて創る良さを感じた。未実施の構想実現に向けても取り組む。
- ・音楽交流（合唱）のような全員の一体感を味わう企画は、院内学級のみならず、病棟スタッフ、入院患者や家族全体に広げた企画（行事の連携など）に繋がれることを感じた。
- ・全体規模と小規模の交流活動に分け、意図的に教員を減らし、主体的で対話的な交流が可能な場面を設定した。目的や規模を絞ることで、自由に活気あるやり取りができた。
- ・交流を通して、人間関係形成や他者への関心を通して社会形成能力を育む中で、自信を付ける機会にしたい。コミュニケーション力は、スキル以外に、場数や実践が重要である。初対面のゲストと積極的に交流できる機会、実践を通して失敗からも学べる場にしたい。
- ・別途、行事係や進路係の企画が1つでもあれば、行事数が増えて活気を生むと思われる。

5 おわりに

教育現場では、時間差や外的要因を踏まえ、実践＝良い成果と安易に評価しない健全な感覚が必要である。寧ろ、他の方法で同等以上の成果を検証することが重要であり、そのために実践を重ねる必要がある。それ故に試行錯誤や失敗にも価値があり、方法論や再現性の乏しい助言より、実証として役立つ。今回は学生の取組みから、明確な手順への工夫、細部にこだわる姿勢や試行錯誤の痕跡が見え、私自身も学びや刺激を受けた。現場で得られる感覚や「見て」「聞いて」「試す」過程で培われる実践を参考に役立てていきたい。

昨年度参加して下さった学生は、今年度、分教室のある附属病院の職員として採用され、小児病棟では児童生徒の担当看護師として、リハビリテーション室では作業療法士として働いている。すれ違う際に「学生ではないけれど、交流なら行きますよ。」と声をかけてもらえることは、とても嬉しい。他職種をはじめ、医療機関や大学と連携しながら、双方にとって有益な取組みや病院連携を模索する中で、院内学級の存在や役割を理解し、協力して下さる方々が各方面に広がっていくことを願いつつ、未実施の構想についても実現に向けて試行錯誤を重ねていきたい。